

ターニングポイント (Turning Point)

学校長 横山 豊



1979年7月。羽田空港から生まれて初めて飛行機という乗り物に乗りました。正直に言うと、離陸時に背中に強力なGを感じ、本当に飛ぶのかとても不安でした。

ロシアとウクライナの情勢から図らずも現在もそうなっていますが、当時はソビエト連邦の上空をまっすぐに飛べる時代ではなかったので、ヨーロッパに行くのは南回りでのフライトでした。香港を経由してインドのニューデリーで着陸し給油している間は、サウナのような灼熱の機内で2時間ほど待機。夜になり離陸すると、丸窓から眼下に見えたニューデリーの街は息を呑む美しさで、まるで満天の星が地面に落ちて散らばったかのようなようでした。そして、一路ドイツのフランクフルトへ。途中機長のアナウンスがあり窓から外を見ると、社会の地図帳でよく見た通りの形をした黒海の輪郭が、肉眼でしっかりと確認できました。フランクフルトで飛行機を乗り換え、イギリスのヒースロー空港に到着。27時間が過ぎていましたが、その間一睡もできず、当時公開間近であったハリウッド映画「エイリアン」の原作本を一冊読み切ることができました。

ロンドンからケンブリッジへ、憧れのコンパーチブルの列車で移動。日本中の各県から1~2名ずつ選ばれた英語科の教員とともに英語科教授法を学ぶために、ケンブリッジ大学で3番目に古いペンブルックカレッジに着いたのは現地時間の16時頃でした。入寮し、大学の食堂で教授陣と夕食のお祈りをしたのが18時。食後は教授たちとパブに行き、店を出た時にはすでに20時を過ぎていましたが、まだ明るく、まるで日本の夕方のようなようでした。門限の21時直前に寮の部屋に戻り、ベッドに横になりましたが、地球の北の果てにたどり着いた興奮で、なかなか寝つかれない、何とも不思議な体験でした。

翌日、授業を受けた後に大学の本屋に行きました。地図帳を見つけ、パラパラとページをめくり日本を見つけた時に、とても驚きました。日本の世界地図では、日本は見開き2ページのちょうど真中にそれなりの大きさでしっかりと描かれています。

ところが、そこで眼にした世界地図には見開き2ページの真中にイギリスがどんと存在し、日本はというと右ページの隅っこの中ほどこに、まことに小さく描かれているだけで、北海道や九州などにいたっては米粒のような小ささでした。英語で日本はfar east「極東」にあり、「極東の国」と呼ばれています。この時を境に、私の価値観と人生観は大きく変わりました。私のこれまでの当たり前は、実は当たり前ではなかったのです。世の中は自分が中心ではなく、自分たち、つまり日本人が中心でもありませんでした。丸い地球の上で、様々な民族が様々な場所で、様々な環境の中で一生懸命に生活をしている。私たちに共通していることは、同じ人間であり、同じ地球という惑星に同じ瞬間に現在進行形で存在しているということだけだったのです。

帰国後に当時の生徒たちにこの2ヶ月のイギリスでの体験を語りながら、私は1つのことを決意しました。「鶯谷で教員をしている間に、いつか生徒をイギリスへ連れていき、“本物”を体験させる」

そして、20年後の1999年、本校で第1回目となったイギリス研修に中学3年生と高校1年生を連れていったのです。

学校説明会の折に、私は中国の故事成語の「百聞は一見にしかず」という言葉を必ず引用します。「100回聞いたとしても、1回見ることには及ばない」。さらに、パナソニックの創業者の松下幸之助氏はこう言いました。「百聞、百見は一験にしかず」100回聞いても見ても、1回の験(1回の実体験)には遠く及ばない、と。

私の人生も、この若き日のイギリスでの体験で1つの転機を迎えました。どの人の人生にも、ターニングポイント(転機)が必ずあります。いつ訪れるかは誰にもわかりませんが、その時にこそ、その人にとっての人生の目的や目標が見つかるのです。人生のターニングポイント(転機)を、絶対に見逃さないようにしてくださいね。